vinetur

フランスの独立系宿泊施設、夏季の客室料金引き上げで販売可能客室当たり売上が1.8%増

Amenitizの調査では、フランスの稼働率は64.8%に低下した一方、平均客室単価は145ユーロに上昇した

2026年11月9日（月）



Amenitizが2026年7月1日から8月31日までの宿泊を対象に実施した調査によると、フランスの独立系宿泊施設は稼働率が低下するなか、夏季に客室料金を引き上げた。データからは、客室の稼働が弱まっても、料金の上昇によって売上の増加が続いた市場の様子がうかがえる。

調査対象となったフランスの独立系施設の平均稼働率は64.8%で、2025年の同時期に比べ1.3パーセントポイント低下した。同じ2カ月間に、販売された客室の平均単価は3.8%上昇し、145ユーロとなった。客室単価と稼働率を組み合わせた指標である販売可能客室当たり売上（RevPAR）は、1.8%増

の94ユーロだった。

この数字は、フランスの事業者が、客室の稼働を高めるよりも料金設定を通じて夏季の売上を維持したことを示唆している。稼働率は低下したものの、料金の上昇がその落ち込みの一部を補うのに十分な規模だった。その結果、販売可能客室当たり売上は減少せず、小幅な伸びとなった。

この調査が重要なのは、大手ホテルチェーンに比べて注目される機会が少ない市場の一部に焦点を当てているためだ。Amenitizによると、データベースには9,312の顧客施設が含まれ、前年比の変化は両年に存在する7,516施設を比較して算出した。サンプルの対象はホテル、ゲストハウス、農村部の宿泊施設だ。これは全国悉皆調査ではなく、各国のすべての宿泊事業者を網羅するものとして同社が示しているわけでもない。

報告書は、フランスとスペイン、イタリア、ポルトガルの独立系施設も比較した。対象市場のうち、確認された数字で目立ったのは、稼働率と料金が同時に改善したスペインだった。サンプルに含まれるスペインの施設の稼働率は68.3%で、前年から0.7パーセントポイント上昇した。平均客室単価は5.6%上昇して126ユーロとなった。スペインの販売可能客室当たり売上は6.7%増加し、フランスの1.8%増を4.9パーセントポイント上回った。

この対比からは、同じ広義の独立系宿泊施設セグメントでも、夏季の動向が異なっていたことがわかる。フランスでは、客室の稼働が弱まるなかで事業者が料金を引き上げた。一方、スペインでは料金上昇に稼働率の上昇も伴い、売上がより速く伸びた。平均客室単価はフランスが145ユーロ、スペインが126ユーロと、絶対額では依然としてフランスの方が高かったが、調査対象のスペインの事業者は需要からより大きな支えを得た。

数値はユーロ建ての名目値で、インフレ調整はされていない。料金上昇の一部が、基礎的な需要の強まりではなく、コストの転嫁を反映している可能性があるため、価格上昇を読む際にはこの点が重要となる。それでもフランスのデータでは、料金の伸びと稼働率の間に明確な乖離が見られ、価格上昇が大部分を下支えしたことが示されている。

この調査結果は、2026年10月付のAmenitizの報告書に基づき、La Tribune de l’Hôtellerieが11月7日に報じた。確認した資料には、元の報告書が10月の何日に公表されたかは記載されていなかった。同誌が関心を寄せるのは独立系セグメントであり、料金や稼働率の変化は、チェーンを中心とする業界報告に見られる傾向と異なる場合がある。

データセットは無作為抽出された全国サンプルではなく、Amenitizの顧客を対象としているため、結果は同社の顧客ポートフォリオ内の傾向を示すものとして捉えるべきであり、フランス、スペイン、イタリア、ポルトガルの宿泊市場全体を確定的に表すものではない。ホテル、ゲストハウス、農村部の宿泊施設の構成比の違いは、特に平均客室単価と稼働率が逆方向に動く場合、国ごとの比較に影響を及ぼしうる。